

2025年度調査報告書

変化していく時代の中で、 持続可能な青少年活動の 在り方とは



兵庫県青少年団体連絡協議会
2025年度(公財)兵庫県青少年本部委託事業

変化していく時代の中で、 持続可能な青少年活動の在り方とは

目次

はじめに	1
パネルディスカッション取材	2-5
「青少年の自己肯定と成長をどう支えるか」 〈コーディネーター〉 中山 迅一（認定NPO法人 まなびと 理事長） 〈ゲスト〉 竹林 ゆかさん（神戸フリースクール） 北林 和樹さん（NPO法人サニーサイド 児童ホームつくし 運営リーダー） 廣重 希美さん（多目的宿泊施設 たかのす東小学校マネージャー） 今井 直人さん（NPO法人 Dive in! 代表理事） 金坂 尚人さん（神戸市立六甲道児童館館長）	
パネルディスカッションを終えて	6
「“あるがままでいい”という本質を捉え続けるために」 中山 迅一	
研修会取材	7-9
「多様な学び・体験をすべての子どもに」 今井 悠介さん（公益社団法人 チャンス・フォー・チルドレン代表理事）	
研修会を終えて	10
「体験格差という問いから、私たちの立ち位置を見つめ直す」 松本 学	
座談会	11-13
「部活動の地域展開と青少年活動の役割」 〈ゲスト〉 森田 啓之さん（兵庫教育大学大学院 生活・健康・情報系教育コース 教授） 竹安 雄一さん（公益財団法人 兵庫県スポーツ協会） 秋定 容子さん（一般社団法人 ガールスカウト兵庫県連盟） 太田 はるよさん（一般社団法人 兵庫県子ども会連合会 副理事長） 〈調査研究委員〉 小寺 隆志（公益財団法人 神戸YMCA ウエルネス事業統括） 松本 学（NPO法人 プレーンヒューマニティー 代表理事）	
座談会を終えて	14
「人生の主権者たる私。—自ら人生を選ぶ力が育つ、これからの青少年活動—」 小寺 隆志	
私たちのねがい	15-16
ひょうご青少年憲章	17

はじめに

私たちが青少年活動を企画・主催することは、図らずも何らかの「格差」を生み出しているのかもしれない――。そんな自省の念から、本年度の調査研究は始まりました。

私がこの世界に足を踏み入れたばかりの頃、一人の大先輩に教えていただいた言葉があります。「いいか、山崎。キャンプを企画する仕事に就くからには、すべての人にキャンプを届ける努力をしないといかん。障がいや病気、参加しにくい壁があるなら、その壁を取り去るのが仕事なんやぞ。『CAMP FOR ALL』この言葉を忘れたらあかん」

その言葉を体現するように、その方がいらした野外活動センターでは、障がい児キャンプや人工透析が必要な人のためのキャンプなど、当時としては極めて先駆的な取り組みを続け、困難を抱える子どもたちへの扉を開き続けていました。

しかし、実際は難しいものです。私たちが良かれと思って企画する活動も、有料であれば参加費を払えない層を排除し、集合場所が遠方であれば交通手段のない家庭を遠ざけます。お弁当の持参や平日の解散時間といった細かな設定一つひとつが、意図せずとも誰かにとっての「壁」となっている事実、私たちはもっと敏感にならなければなりません。

今回の調査研究では、現代における「格差」がより複雑化・多層化している実態が浮かび上がりました。特定の課題に焦点を当ててアプローチしても、そこから零れ落ちる新たな課題や対象者が次々と浮き彫りになる。この『いたちごっこ』のような状況の中で私たちが突きつけられた格差の本質、それは子どもが自らの意志で人生を『選べない』状況に置かれていることにほかなりません。

私に「CAMP FOR ALL」の精神を教えてくださいと近江岸建助さんがいらした、神戸 YMCA 余島野外活動センターは、本年度末（2026年3月）をもって75年の歴史に幕を閉じられます。活動の拠点は形を変えますが、そこで育まれたレガシーは、同じく青少年育成に関わる私たちが絶やしてはなりません。

「不易流行」という言葉があります。守るべき本質的な精神は変えず、一方で時代の変化にはしなやかに対応していく。すべての子どもに活動の機会や場を届けるという「不易」の信念を持ちながら、活動の形や場の持ち方を「流行」に合わせて更新し続けること。それこそが、主催者としての私たちの責務です。

子どもたちが抱く願いも、私たちが向き合う課題も、活動や場のあり方も、すべてが多様であっていい。その多様さこそが、すべての子どもを包み込む力になると信じています。本報告書が、次代を担う子どもたちの「未来への歩み」を支える皆さまにとって、これまでの当たり前を問い直す、一つの始まりとなることを願っております。

結びに、本調査研究にご協力いただいたすべての関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

兵庫県青少年団体連絡協議会
調査研究委員会 委員長
山崎 清治



『青少年の自己肯定と成長を どう支えるか』

パネラー

コーディネーター／調査研究委員

認定NPO法人まなびと理事長

中山 迅一

神戸市で学童保育、放課後等
デイサービス、外国人留学生
のシェアハウスなど、地域での
青少年の居場所づくりに幅広く
携わっています。



竹林 ゆかさん 神戸フリースクール

不登校の子供達を通ってくる居場所として、宇治川商店街で拠点を構えています。子どもと関わる中で大切にしていることは、子どもと大人がフラットの関係にいるということ、子どもたちと一緒に今を楽しむこと。そして、子どもたちにとって、「体験をする」ということが、とても大切だと感じています。子ども達が育っていく中で、今を楽しく過ごすことが、人生の財産となります。子どもたちには、たくさん遊んでたくさん笑っていてほしいなと思っています。



北林 和樹さん NPO法人サニーサイド 児童ホームつくし 運営リーダー

学童保育、障害福祉のNPO法人を運営しています。学童保育「児童ホームつくし」は、障害の有無に関わらず、生活を共にする場所です。特徴的なのが、地域の公民館のような「シェアスペースひなた」を併設しているということです。地域の人々のやりたいことや、考えたことなどを実現するような場所として、地域との繋がりをつくりながら、子どもが居場所と感じられるよう向き合っています。大学時代、生涯学習サポート兵庫で子どもたちとキャンプをしたことも、面白かったな、と心に残っていて、いろいろな経験が、今の学童保育の運営に繋がっています。



廣重 希美さん 多目的宿泊施設 たかのす東小学校マネージャー

山口県で生まれ育ち、現在は兵庫県宍粟市で暮らしています。視覚的刺激が好きで、旅をしているいろいろなものを見るのが好きです。20代の頃は、キャンプの仕事をしていました。子どもたちと一緒に体験をし、「こういう発見をするんだ」と、子どもたちから刺激をもらっていました。スキーインストラクターも経験し、30代になるタイミングで「地域おこし協力隊」として宍粟市に移住しました。現在、閉校となった小学校を活用した宿泊施設の運営に携わっています。



今井 直人さん NPO法人 Dive in! 代表理事

長田区で中高生の場づくりをしています。以前は、尼崎市立ユース交流センターで、中高生の場づくり、ユースカウンスル、若者議会の取り組みなどを行っていました。現在は、ユースセンターを作ろうと計画をしていて、高校生や大学生と一緒に、出張ユースセンターを実施したり、物件を調べたりしています。



金坂 尚人さん 神戸市立六甲道児童館館長

NPO法人 S-space(スペース)は、神戸市で3つの児童館、芦屋市と神戸で学童保育、野外活動、キャンプ、保育園などを経営しています。私は、神戸市立六甲道児童館の館長をしています。また、京都教育大学で非常勤講師をしています。専門は伝承遊びで、こま回しや光る泥だんご、草花遊びなどの講演をしています。



中山

今回、「自己肯定と成長」というテーマでお話をしていきたいと思います。子どもたちは大人から、「あなたはあなたでいいんだよ」と言われながら、今必要としているタイミングではない体験に参加させられたり、今望んでいない自分を目指すよう大人に促されたりしていると感じることがあります。そのバランスをどう考えたらいいのか、最近すごく悩むようになりました。このモヤモヤを言葉にしてみると「自己肯定感」と「成長」というキーワードが出てきました。パネラーのみなさんは、この2つの言葉についてどのように考えていますか？

竹林

フリースクールを見学に来た時の子どもたちは、自信のなさそうな表情をしています。学校に行けなくなった自分に対する自信のなさ、未知の場所への緊張、不安など理由はさまざまです。本当は外に出たくないけど家の人に連れられてくる子もいます。

フリースクールで、やはり一番大きいのは、自分と同じような仲間たちがいるということですね。わかってくれる大人がいる、しんどい毎日から解放される、自分の意見を言える、それが受け入れられる。どうして学校へいけなくなったのか、理由を最初から聞くことはあまりしないようにしています。「どうして?」と言われなくても済むのは、子どもたちにとっては非常に解放感があるようです。

先日、「お昼はステーキがいい」と言った子がいました。「できない」と大人から一方的に言われるのではなく、仲間と一緒に考えていました。仲間の意見を聞いて、自分でとことん考えて、最終的にはどうするか、自分で「選ぶ」ということがすごく大事だなと思いました。

「成長」は日々の積み重ねだと思います。そしてそれは「成長」というよりも「変化」だと捉えています。仲間から見聞きしたのがきっかけで、やったことのないことをやってみようと一歩踏み込んでみようと思うことがあると考えています。そこから世界が広がるんですね。

北林

最近、長生きしたいと思うようになって、自分のことを愛せるようになったのかなど感じたことがあって。これが

自己肯定感に繋がるかはわかりませんが、かけがえのない思い出が自分の中に溜めてきた感覚があって、命を大切にしたいと思うようになりました。思い出は取り替えることができないと思うんです。学童保育などにおいては、一人ひとりのかけがえのない思い出や行事を大事にしています。

「成長」よりは「発達」という言葉が好きなのですが、いろんな視点、見え方が広がっていくことが成長、発達なのかなと。つまり、自分から見たもの、人から見たもの、組織から見たもの、地球の視点から見たものというように視点が広がっていくことだと思います。

組織のルールは影響力が高いため、一人ひとりの子どもの声が消えやすいと感じます。なので、ルールというものをなくし、自分も人も大切にするという方向性だけ決めて、話し合いをするようにしています。

廣重

自分は自己肯定感が強いと思いますが、自信があるかどうかは分かりません。できることだけでなく、できないことも認められるのが、自己肯定だと思います。子どもたちに対しても、この視点を持って関わりたいです。

以前から、「成長したね」と言葉をかける大人に違和感がありました。「成長」ではなく「変化」かなと思っていて。本人が思う「こうなりたい」という思いは目に見えないので、「成長したね」と声をかけるのは他者の視点じゃないですか。本人からの視点とは違うのではないかなと思うんです。一方で、「できたね」と事実をそのまま伝える声掛けは、両者が同じ認識になると思っています。



今井

自己肯定感は、「今、ここに存在し息をしているだけで素晴らしいと感じること」だと思います。僕自身、人のために生きていること、何者であるかを他者から評価されることに依存していたと、大人になってから気づきました。そうではなく、存在するだけでいいというのが自己肯定感です。

「自己肯定感を上げさせる」、「成長させる」ということではなく、自然に、自分を大切に成長したいと思える環境設定を大人や社会がやっていくべきだと思っています。

金坂

児童館は、0歳から18歳までが利用できる場所です。対象者を絞って専門的に介入する「ターゲットアプローチ」と、広く全員を対象にする「ユニバーサルアプローチ」があって、児童館は「ユニバーサルアプローチ」です。先ほど、「自分で選択することが大切」という話がありましたが、児童館は子どもたち自身が利用する利用しないを自分で判断ができる施設です。みんなにとって児童館は、いつでも立ち戻れて、「おかえり」と迎えられる場所です。



私が、児童館の活動で大事だなと思っているのが、「根拠のない自信」です。「根拠のある自信」は、いつか崩れる時が来ます。「練習したから試合に勝った」ということもあれば、「練習したけど試合に負けた」ということもあります。ネガティブな感情を大人が受け止めないと、そのような感情を出すのはダメなことだと子どもたちが思ってしまいます。それが子どもたちの生きづらさに繋がる。結果ではなく過程が認められる機会が多いと、うまくいかなかった時に、そこで終わりではなく、それを糧にして継続し、どうにかなると思えるのではないのでしょうか。私はこれを「根拠のない自信」と呼んでいます。根拠のない自信を育てて、しなやかに戻れる力、レジリエンスを高められるようにするのが、私たち大人の役目だと考えています。

大人が子どもに対して「ねらい」を多く求めすぎると、子どもは大人の圧を感じて「やりたくない」と言います。私は、「ねらい」を悟られないようにし、「願い」をイメージするようにしています。

中山

パネラーのみなさん、ありがとうございました。「自己肯定感」と「成長」についてのお話を踏まえて、これからの子どもとの関わりに生かせそうなことや気づきがあれば教えてください。

北林

『うっかり成長』をどう作り出すかということを考えています。イベントなどでの他者とのやりとりや偶然の環境で、うっかり新しい体験をすることって大事だなと思っています。

廣重

誰が来てもいい場を作る時に、広報しないと誰も来ないので、イベントのチラシを打ち出すんですよ。そのプログラム自体を必ずしもやらせたいというわけではないんです。でも、プログラムを提示しないと誰にも見つけてもらえないし…ということを考えていました。

中山

確かにそれはありますね。何かしらのアクションを取らなければ自分たちの存在に気づいてもらえないですが、そのアクションが届けたいものの本質かと言われると違っていることもある。

竹林

北林さんの「代替できない思い出」は、生きている中で子どもたちにとって大きいものだろうなと思いました。同じ体験をしていても、それぞれ個別の思いがある。こう思っていて欲しいという気持ちを押し付けてしまったり、仕組みでしまったりすると、子どもたちの活動は終わっちゃうだろうなと思います。子どもにこう思ってもらいたいではなく、「私はこう思う」という視点で活動していきたいと思いました。子どもたちも大人の私たちも自由な思いを持っていいと思いながらやっていきたいなと感じました。

中山

金坂さんの「ねらい」を「願い」という話とも共通すると感じました。「ねらい」と「願い」の行き来が大事なのかもかもしれませんね。





今井

ユースセンターがあるというだけでは誰も来なくて、「ねらい」を持ってアプローチを考えないと対象となる人に会えないと考えていて。大人がどう変わっていくのか、社会がどう変わっていくのか。ねらいを明確にして行動する必要があります。若者に対して「ねらい」を持つことはほとんどないのですが、社会に対して「ねらい」を持っている気がします。

中山

ありがとうございます。提示したプログラムを見て子どもたちが来てくれた時に、僕たちが本当に体験して欲しいこと、届けたいことは何なのでしょう。

北林

ピーター・センゲの著書「学習する組織」において、「学習とは、自分の描いた絵に近づいていくプロセス」と表現されています。例えば、赤ちゃんが周りの人を見て「歩

きたい」と思うように、ビジョンは関係性の中から生まれます。それぞれが「こうなりたい」という絵について支援していくこと、そのための環境作りをすること、人と人の関係性をよくしていくことが大事だと思っています。

金坂

「成功体験」や「自己肯定感」が一人歩きしていると感じることがあります。「私は私でいい、他は関係ない」というのは違うのではないかと感じるが多いです。常に成功してきた人、失敗したことがない人は、脆い。成功体験も大事ですが、幼児期の失敗体験やうまくいかなかった体験も重要だと思えます。最初から成功へのレールに乗せられると楽しくなくて、工夫する余地があるから面白いんです。イベントに興味を持ってもらうのに「ねらい」はあっていいのですが、ゴールに工夫する余地があることが重要。子どもたちを信じて待ってあげたいと思います。一番強い人間は、いろんなことを面白がれる人間だと思います。

中山

「成功体験」がひょっとして「成功しない体験」になっていませんか、ということですね。失敗しても大丈夫だよ、ここにいるだけでいいんだよと、そんな場所があるんだと気づいてもらうのも一つの体験だと思います。成功したから認められるとかそういうことじゃないんですよ。

北林さんの言う「ビジョン」に向かっていくのは本人なんだから、試行錯誤はあって然り、それが楽しい、それを周りの人が邪魔してはいけない。なんとなく僕の最初のモヤモヤが晴れた感じがしました。ありがとうございます。





「あるがままでいい」 という本質を捉え続けるために

中山 迅一 | 認定NPO法人まなびと理事長

若者の自己肯定感と成長をどう支えるか、という問いでパネルディスカッションを行いました。自己肯定感とは、「何かができるから大丈夫」ではなく、「できなくても大丈夫、根拠がなくても大丈夫」という感覚のこと。成長とは、「ここまでできたからOK」ではなく、視点が育っていくこと。そう考えると、「発達」という言葉の方が適しているのかもしれませんが。また、周りとの関わりの中で「自分はこうなりたい」というビジョンを手に入れ、そこに向かいたいという欲求をエネルギーに人は進んでいく。そうだとすれば、人を「育てる」という感覚よりは、人が「育つ環境」をつくることこそが大人の使命ではないか。パネラーの皆さんのお話の温度感が揃っていたことに、「青少年活動」という言葉に込められた魂を感じました。

あるがままでいい。これが青少年活動を通じて子どもたちに届けたい本質だとするならば、なぜこんなにも私たちは悩み、苦しむのでしょうか。それは、この日会場に集まった皆さんが日々の関わりの中で感じる葛藤以上に、その外側にある荒波を恐れているからではないでしょうか。私自身もその一人です。部活動の地域展開や、SNS・スマホの発達、野外活動センターの縮小など、世間の流れが子どもたちを「青少年活動」から遠ざけ、大人の経済活動に近づけていることに、私は危機感を持っています。

この危機感に対する答えは、効率や成果を求める「社会の物差し」から、現場の大人がいかに意図的に距離を置けるかにあると感じています。「社会の物差し」に合わせることで、事業資金や利用者、賛同者が増えることもあるかもしれませんが。けれど、勇気を持ってそれらを「手段」にとどめ、本質を手放さないことが必要です。パネラーの皆さんの言葉を借りれば、それは「ねらい」ではなく「ねがい」で子どもと向き合うことです。部活動の地域展開やデジタル化の波は、居場所を「機能」や「コンテンツ」として切り分けようとしています。しかし、青少年活動の本質は、何者でもない自分に戻れる「余白」を守り抜くことにあります。

結局のところ、私たちができるのは「一日分生きたね」と、そ

の子の現在地を全肯定し続けることだけなのかもしれません。大人が無理にまとめようとせず、性急に答えを出そうとせず、ただ自分自身も「あるがまま」に活動を楽しむ背中を見せる。そうすることで、子どもたちは自らの意志で視点を広げ、歩み始めます。

「あるがままでいい」という本質を捉え続けるために、この日、私自身が最も大切だと感じたのは「仲間の存在」です。日々の活動で悩み、苦しみながらも、そのすべてを肯定し合えるような、あの会場の雰囲気は私はこれからも忘れたくありません。これからも、青少年活動に関わる大人が、まずは互いの「あるがまま」を認め合い、楽しむことから始めてみませんか。



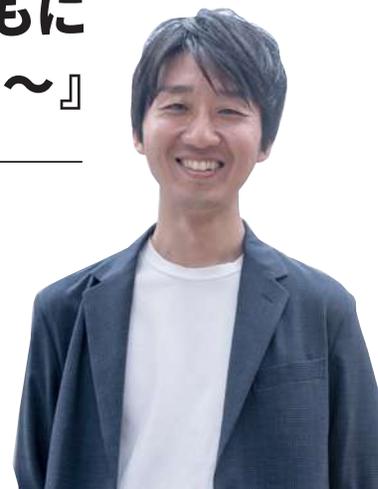
『多様な学び・体験をすべての子どもに ～体験格差の実態と解消に向けて～』

講師

公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン 代表理事

今井 悠介さん

小学生の時に阪神・淡路大震災を経験。大学在学中に不登校児童の支援等に携わる。卒業後、KUMONを経て、東日本大震災を契機に当法人を設立・代表理事に就任。東京都生涯学習審議会委員、学校法人軽井沢風越学園評議員等を務める。著書『体験格差』（講談社現代新書）。



活動紹介

阪神淡路大震災を契機に、関西学院大学の学生たちが中心となり、避難所での無料学習支援や野外キャンプなどの活動を開始しました。2000年に全国初の学生主体のNPO法人「プレーンヒューマニティー」を設立し、子どもの学校外での学習支援、体験活動、不登校生徒の支援などさまざまな活動を行ってきました。2008年のリーマンショック、2011年の東日本大震災を経て、「多様な学びをすべての子どもに」というミッションを掲げ、「一般社団法人チャンス・フォー・チルドレン」を設立しました。



子どもの体験格差の現状

子どもたちのやりたいことはそれぞれにあり、子どもたち自身の個性・特性もそれぞれです。学校以外の教育の場、学びの機会にアクセスできるかどうかは、家庭の経済状況によって決まるとい現状があります。

「体験格差」は、2008～2010年頃から国内で問題視されるようになりました。体験格差の背景には、貧困の問題があります。日本の貧困の特徴として、「貧困状態が見ただけでわかりにくい」「ひとり親家庭が貧困に陥りやすい」「親の貧困状態が世代間連鎖する」ということが挙げられます。日々の生活も困窮していれば当然、学びや体験への支出は難しくなります。教育の機会が奪われれば、子どもたちの未来の選択肢を奪うことにも繋がることが危惧されます。そのような子どもたちに対して、目の前の生活を保証するだけでなく、未来の選択肢を増やしていく支援が必要と考えています。

体験格差の解消に向けた取り組みの事例

チャンス・フォー・チルドレンでは、経済的困難を抱える家庭の子どもたちに、学校外での学びで利用できる「スタディクーポン」を全国10都府県で提供しています。全国から寄付金を集め、子ども本人が希望する学びや体験活動（塾、習い事、キャンプなど）に使えるクーポンを発行する仕組みです。

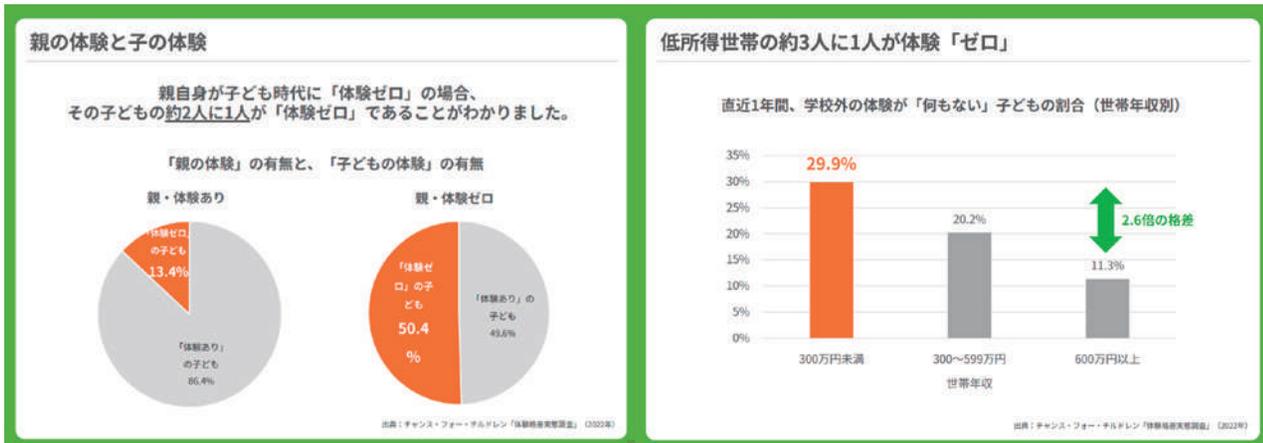
スタディクーポンの特徴

- 1、使用用途を子どもたちの学校外の学びや体験に限定し、現金給付は行わない
- 2、子ども本人がやりたいことを自分で選択する
- 3、大学生ボランティアによる見守りがある



子どもたちの将来の選択肢は、家庭の状況によって制限されてしまうことがあります。社会的な支援があることによって、選択の幅は広がると考えています。現在は、全国 20 以上の自治体が「スタディクーポン」を政策化しています。

「多様な学びをすべての子どもに」というミッションのもと活動してきた 10 年間。私たちが積み残した課題は、スタディクーポンの 9 割以上が受験の対策で利用されており、団体設立の原点でもある「体験」の機会を十分に届けられていないということです。やりたいことが叶わない経験をした子どもは、その後にやりたいことがあっても言わなくなることがあります。衣食住の保障、学習面の支援はぜひ進んできましたが、体験活動の機会は社会の中でどう捉えられているのか。「体験の機会保障」という視点で、5 年前から本格的に実態調査を始めています。



なぜ体験保障が重要か

①子どもの成長の機会

- ・五感を使って体験をしていく ⇒ 感情が育つ ⇒ 思考が深まる = 経験を通して学びを得る
- ・余白、遊びがあることで、自分で考え、決定し、ともにつくる過程が生まれる
(大人が一方向的に体験を提供しようとするのは矛盾している)
- ・体験を通していろいろな自分と出会う
- ・多様な知性、感性を磨く

②想像力の幅・選択肢を広げる機会

- ・体験をしたことがあるからこそ、選択肢を知っている
- ・想像できる幅を広げていくこと=選択肢を広げていくこと

③人や地域と繋がる機会

- ・例えば、大学生と触れ合うこと自体が選択肢を広げることになる

子どもの貧困の問題は、選択肢にたどりつけないこと。いかに制度を作って、人や地域と繋がれるような機会を作るかが大切だと考えています。

大切にしたいこと

①子どもの意思、「やってみよう」を中心に考える

- ・効果があるからではなく、「子どもの権利」として捉える
- ・親の「消費活動」にしない

②子どもたちを見守る大人の存在がある

- ・体験を通じてわき起こる気づきや学びや感情を共有できる

「体験格差」解消に向けた打ち手 ～ハロカル(子どもの体験奨学金)～

『ハローカルチャー』(=文化・体験との出会い) & 『ハローローカル』(=地域の大人との出会い)

スタディクーポンの仕組みを使いながら、経済的困難を抱える家庭の子どもに、体験活動で利用できる「ハロカル奨学金(クーポン)」を提供する取り組みです。主に小学生が利用しており、地域のスポーツ活動や文化活動、キャンプなどの自然体験、職業体験などに使用することができます。

ハロカルの特徴・大切にしていること

① 体験の担い手は、地域に根ざした多様な人々に参画してもらう

→地域全体で子どもたちを見守る環境をつくる

② 地域コーディネーターのサポートがある

子どもたちと体験活動を繋げる役割など

アンケート(2023年度)では、参加理由の9割が「子ども自身がやりたがったから」でした。親がさせたいことではなく、子どもが本当にやりたいと思うことは何か。コーディネーターが子どもたちの声を大事にしながら体験活動に繋げています。子ども自身の「自信がついた」、親の「心の余裕ができた」、「親子関係が良くなった」、「子どもがよく話すようになった」などの声もアンケートにあがっています。

また、現在は北海道から沖縄までの4つの地域でハロカルを実施中です。今後も各地で地域に根差して活動するNPOと連携し、全国の子どもたちに体験機会を届けていきます。

体験格差をなくすために必要なこと

提案① 体験格差の実態調査を継続的に実施する

提案② 体験の費用を子どもに補助する

提案③ 体験と子どもを繋ぐ支援をする

提案④ 体験で守るべき共通の指針を示す

提案⑤ 体験の場となる公共施設を維持し活用する

私たちが目指すのは、経済状況や一人ひとりの特性に関わらず、多様な学びの機会によって子どもたちを包摂できる社会です。「子どもの教育格差をなくす(平等)」、「子どもの自由な意思決定を支える(自由)」、「子どもの多様性に応える環境をつくる(包摂)」ということを大切にしながら、これからも「多様な学びをすべての子どもに」というミッションに取り組んでいきます。



体験格差という問いから、 私たちの立ち位置を見つめ直す

松本 学 | NPO法人 プレインヒューマンティニー 代表理事

今井悠介氏の「多様な学び・体験をすべての子どもに～体験格差の実態と解消に向けて～」の講演では、公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン（以下、CFC）が取り組む教育格差および体験格差の取り組みについてご講演をいただいた。CFCが体験格差の問題に注力して取り組むきっかけは、教育格差の是正に取り組む中で、教育クーポンの9割以上が狭い意味での「学習（塾・受験対策）」に利用されているという事実であった。現在、CFCでは体験格差解消に向けたプロジェクト「ハロカル」に取り組み、各所で子どもたちに体験奨学金を提供している。

部活動の地域移行や体験格差に関する調査研究の中で感じたことは、「部活や体験ができていない子どもたち=かわいそう」と理解するだけでよいのだろうか、という点である。調査研究を通して、わたしたち体験活動団体は、子どもたちが経済状況によって様々な体験ができないという状態理解のみにとどまり、そこに対して安易にサービスを提供するべきではないと感じている。この課題において重要なことは、社会が子どもたちに対し、学び、そして自身で選択する権利を十分に保障できていないという点をサービス提供側も理解することであるとわたしは考えている。

今井氏が話すように、昨今の社会では、子どもたちが挑戦したいと思ったときに、経済的な状況によって自分自身の将来の選択肢を選べないのが現状である。講演の中でも紹介されていた「息子が突然正座になって泣きながら『サッカーがしたいです』と言ったんです」というエピソードにもあるように、わたしたち大人や社会を形作る立場にある人間は、子どもたちが挑戦する権利や学ぶ権利を保障していく必要があると感じている。しかし、昨今の習い事や体験活動の議論の中では、活動によってどのような成果があるかに焦点があてられていることが多い。体験による効果を打ち出し、「体験にはこうした効果があるからやったほうがよい」と示すのではなく、子どもたちがやりたいことに挑戦し、純粋に楽しいと感じる時間を保障することがまず重要であり、その結果として後から現れてくるものを「成果」とし

て検証していく姿勢が大切なのではないだろうか。「成果」が強調される野外体験活動や「結果」が求められる部活動ではなく、子どもたちの「挑戦したい」という気持ちを引き出し、背中を押し、ときには見守っていく。そのような体験活動の機会を保障することの必要性を、改めて痛感した。

体験活動を営むわたしたちにとって、体験格差という社会課題に対して果たす役割は大きい。一方で、この課題に取り組む中では、公益団体における運動性と事業性のジレンマや、支援を受けることに対するスティグマといった問題が大きな障壁となっている。そのため、青少年団体連絡協議会のようなネットワーク団体の役割は非常に重要であると感じている。従来の情報発信やノウハウ共有、活動助成に加え、加盟団体が互助的に関わりながら、兵庫県内の子どもたちの体験活動を地域全体で保障していくことが、今後ますます求められていくのではないだろうか。そして、子どもたちが経済的な問題や外的要因に左右されることなく、自分らしく選択し、生きていける社会のプラットフォームとなるネットワーク組織としての役割を果たしていきたい。

そのためにも、各団体が自らの活動を振り返り、「子どもたちの挑戦したいという気持ちを、本当に支えられているのか」「体験の成果ではなく、選択の自由を保障できているのか」を問い続けていく必要があるのではないだろうか。



部活動の地域展開（移行）と青少年活動の役割

座談会メンバー

森田 啓之さん（兵庫教育大学大学院 生活・健康・情報系教育コース 教授）

保健体育分野を専門に、体育・スポーツに関する哲学的研究に従事。「学校」と「地域」の関係性から学校体育の在り方を探究している。近年は総合型地域スポーツクラブの育成や部活動の地域移行に関わり、現場に寄り添いながら研究と社会貢献活動に取り組んでいる。

竹安 雄一さん（公益財団法人兵庫県スポーツ協会）

秋定 容子さん（一般社団法人ガールスカウト兵庫県連盟）

太田 はるよさん（一般社団法人兵庫県子ども会連合会 副理事長）

〈調査研究委員〉

小寺 隆志（公益財団法人神戸YMCA ウェルネス事業統括）

松本 学（NPO法人ブレンヒューマニティー 代表理事）



部活動の地域移行、その背景にある「大人の意識」

小寺

部活動の地域移行について、背景とそのポイントについて教えてくださいませんか？

ンできるような仕組みがあれば、その後の人生においても、生き抜く力になると思います。

竹安

部活動の地域移行は、教員の働き方改革がきっかけですが、現場では葛藤も多いです。専門外の競技指導に負担を感じる先生がいる一方で、部活動が好きで教員になった人もいます。少子化で希望する部活動を選べない子どもが増える中、十分な受け皿が整わないまま地域展開が求められていることに、苦しさを感じています。ただ、ダンスやモルックなど、これまでになかった活動が広がる可能性もあると思っています。

秋定

さまざまな人と活動すること自体が、人間形成の場としてはとても大切です。ガールスカウトの指導者として、子どもたちにとって魅力的な場になるよう、私たちも試行錯誤しています。

森田

部活動の地域移行という言葉が最初に用いられたのは、『学校の働き方改革を踏まえた部活動改革（文部科学省、2020）』です。しかし、この表題自体は誤解や反発を生むのではと私は心配しました（教員の働き方のために部活動改革をするのか!?? と）。国が地域移行に踏み切った理由はそれの一つですが、最も大きいのは、「学校という枠組での部活動が維持できなくなっている」ことです。しかし、教員や保護者含めた多くの部活動経験者は「なくなるのは困る」という感情で思考が止まってしまうがちで、「部活動とはこういうもの」という固定観念を一旦脇に置くことが新たな展開をする上での鍵となると考えています。

森田

日本の部活動には、『一つのこと生活も気持ちも捧げるのが善』という価値観があります。でも、今の枠組みの中で頑張る話ではなく、思い切ったスクラップ&ビルドが必要な段階です。子どもたちは、大人が考える以上に、変化に柔軟です。大人たちが多様性を認め、勇気をもって決断する時期だと思います。

太田

地域に移行することで、学校に通いづらい子どもが蚊帳の外にならないか心配です。大人の固定観念が外れれば、スポーツに限らず、もっと気軽に、長く通える場が出来るのではないのでしょうか。子どもたちが、自ら1週間でデザイ



教員の役割は「部活動指導」からどう変わるのか

松本

これからは、教員の役割が「部活動の指導」から「ライフスタイルの指導」に変わっていくのではないかと思います。先生方はどう捉えていますか？

森田

まだ、議論が部活動の話にとどまっている印象はありますね。今後は、学校として「部活動ではない何か」を、どう教育として展開していくのが問われてくると思います。

竹安

生徒会活動を通して、「どんな活動をしたいか」「無理のない放課後の過ごし方は何か」を考え、校内に受け皿をつくっている学校もあります。学校と地域が一体となって、学校づくりを進めるために設置している学校運営協議会においても、話し合おうとする動きも出てきていますね。

森田

学校に寄せられる相談で一番多いのは、実は部活動のことなんです。今後、それがなくなったとき、「本来、学校の先生がやるべきことは何か」に改めて目が向くはず。教材研究や研修、授業づくり、生活指導、学級経営など、本来の役割がより問われてくると思います。

竹安

部活動は、先生にとって助けになる場面もあれば、矢面に立たされる場面もあります。ただ、部活動という“武器”

がなくなったとき、本当の指導力が試される。人を育てることや学級経営は本当に難しく、学び直しが必要になる先生も多いと思います。

部活動をきっかけに学校に来ていた子どもたちを、部活動以外でどう活躍させるかという生徒指導の視点も大事です。だからこそ、それに代わる場が、学校や地域のさまざまな場所にあつたらいいと思います。

太田

部活動を頑張りたい子も、勉強を頑張りたい子も、誰一人取り残したくないですよね。

森田

以前の調査では、「自分のペースで、仲間と楽しくできる活動」を求める声が多くありました。

竹安

スマホや SNS との付き合い方も、保護者が心配している点です。人との関係は、もっと揺れ動く体験の中で学ぶもの。だから、活動の内容は何でもいい。地域で子どもを育てる体験の場をつくるのが、ますます大事になってくると思います。学校の先生だけでは、もう限界がありますから。

地域が果たせる役割とは何か

小寺

青少年団体の立場として、地域はこの流れをどう見つめ直していけそうでしょうか？

太田

地域には、子ども会に限らず、いろんな活動や関わり方があります。もっと「ウェルカム」な存在として、コミュニティを頼り直してほしいと思っています。地域の中には指揮をとれる大人もたくさんいて、その人たちの活躍の場にもなるし、子どもが多くの人と関わる機会もつくれる。口出ししすぎず、一緒に地域として育っていく、そんな関係を考えていきたいですね。実際、出入り自由で子どもたちが自分でやりたいことを決める場では、責任感や大人を説得する力も育っています。そうした場を見守り、学校とつなぐコーディネーター役が地域があればいいと思います。

秋定

ガールスカウトでは、幼児から高校生、さらに 60～70 代の大人まで、幅広い年代が関わります。いろんな年代の大人と出会い、「あんな人になりたい」と思えることが、子どもにとって大きな魅力です。地域の中で自分の居場所を見つけ、つながりが生まれていくことが、大切な役割だと感じています。

森田

学校は意図的・計画的に仕掛けをつくる場ですが、地域にはその場自体が持つ「無意図的な影響力」があります。だからこそ、多様な人や経験に出会える。計画的な学校と、自然な広がりを持つ地域、この両輪で子どもを育てていくことが、今まさに問われていると思います。

松本

子どもが自分で判断する力を育てるには、小学校時代の過ごし方もとても大事ですね。中学校だけの話ではないと感じます。

太田

小学校も中学校も、義務教育として一体で考える場や機会が必要ですね。

竹安

小学校と中学校の大きな違いは部活動です。保護者の期待が大きく、そこで先生が疲弊してしまうこともある。でも、逆の側面もある。そのギャップをどう埋めていくかが課題だと思います。

地域と学校はどうつながれるのか

松本

地域と学校の連携は、やはり進めたほうがいいのでしょうか？

竹安

できるなら連携したほうがいいですが、現実には難しい地域も多いです。人材や地域力の差があって、「地域に任せましょう」と言われても無理だという声もあります。ただ、地域だけの責任にもできない。一保護者としては、できる範囲で学校を支えたいという思いもあります。

太田

地域の中につなぎ役となるコーディネーターがいれば、少しずつでも動き出せますが、ゼロのところはなかなかつながらないですね。

小寺

新しい体験が増える反面、逆になくなってしまいそうな体験って、どんなものがあると思いますか？

松本

今は部活動があるから、インフラ的に体験ができていますが、移行することで、選択できる子とできない子の差が広がるのでは、という心配もあります。

竹安

体験格差は確実に出てくると思います。部活動が担ってきた役割は大きすぎました。クラブチームに行く子もいれば、そこまではない子もいる。部活動をしたくない子や、スマホに流れてしまう子も含めて、みんなで育てていく視点が、学校教育として大事だと思います。

森田

これまで情報を集めなくてもよかったのは、部活動があったからです。今後は、子どもたちが選べるよう、情報をまとめて見せる仕組みや、太田さんがおっしゃった「コンシェルジュ」のような人が必要になります。学校を拠点に、地域の力を借りながら放課後を支える動きも出ていますが、特に平日の放課後をどう支えるかは大きな課題です。

多様な子どもを支える「地域の器」

森田

地域展開が進む中で大切なのは、理念やビジョンをどれだけ共有できるかです。活動がバラバラにならないよう、市や自治体が一定の方向性を示し、子どもに多様な経験をさせるという精神性を守る仕組みが必要だと思います。

秋定

指導者次第で、活動の雰囲気は大きく変わります。熱血になりすぎる人が出てくる可能性もありますね。

竹安

やりたくない子は無理にやらなくていいし、やりたい子はやれる。選べるのが大事です。この2〜3年は過渡期だと思っていますし、コロナ世代の子どもたちには、どんな形でもいいから体験の機会を増やしてあげたいです。

秋定

ガールスカウトでは、学校に行きづらい子が安心して来られる場になっているケースもあります。学校では言えな

いことを話せる大人がいることも、地域活動の強みだと思います。

森田

多様性という意味では、障がいを抱えたお子さんなど、支援を要する子どもへの対応は、地域だけで完結するのは難しい問題です。エリアを越えた連携や、イベント型の参加、スポット的な関わりなど、受け入れ方の幅を広げることも必要でしょう。

中山

地域移行は、子どもだけでなく、大人にとっても学び直しの機会になります。人権や関わり方を学び続けることが、豊かな地域につながると思います。

竹安

その手段として、スポーツや体験活動はとても有効ですね。部活動が展開するというより、いろんな活動が広がっていくイメージだと思います。

座談会まとめ

この座談会を通して見てきたのは、子どもや若者が、スポーツや体験、学びを楽しみながら、自分のペースで自分の時間をデザインしていく姿でした。そのために、大人や地域、団体ができることは何か。学校教育の枠組みも含めて、教員だけでなく地域の担い手も、あり方を見つめ直すことが、今求められているのだと思います。





人生の主権者たる私。 —自ら人生を選ぶ力が育つ、 これからの青少年活動—

小寺 隆志 | 公益財団法人神戸YMCA ウェルネス事業統括

中学生が身を置く環境は、学校という日常性と同質性の高い空間です。しかし、部活動地域移行により、彼らが踏み出す空間は、多様な価値観が交錯する地域という「カオス」の場です。このカオスの中で、中学生はそれぞれが歩みつつ、右往左往しながらも成長を遂げていく可能性があるのではないのでしょうか。

部活動は教員という教育者が課外活動の位置付けの中で指導しながら、効率性や競争、達成といった成果主義的な価値を追い求める場所だったのではないのでしょうか。しかし、地域というカオスの中で過ごす場合、中学生は多様な大人（地域の指導者、大学生、多世代の住民）との出会いを通じて、「こうあるべき」という固定概念を揺さぶられます。異なる背景を持つ人々と関わる中で、中学生は「自分にとっての正解」を自ら模索し始めます。ある種画一的な集団規範から解放され、多様な価値観を「カオス」としてそのまま受け入れることで、不確実な社会を生きるための柔軟性と適応力、さらには他者への寛容さを身につけていきます。

さらに、部活動地域移行後の彼らの世界では、「私は、どのコミュニティに属し、何に、どれだけの時間を割くか」を自ら選択することができます。自分の人生（例えば1週間のスケジュール）を自らデザインする経験は、中学生に強烈な主体性をもたらします。これは単なる「時間管理」ではなく、自分の「やりたい」という内発的動機に基づいた彼ら自身の「生き方」の礎となるような経験の場になります。失敗や試行錯誤を繰り返しながらも、自分の趣向やリズム、価値観との照らし合わせする過程で、彼らは「自分の人生の主権」を確立していきます。

さて、地域の中には様々な属性の人々と交わる場が存在します。私たち青少年団体もその一つです。地域の多様な青少年活動の場では、中学生は複数の役割と居場所を持つことができます。学校という社会の中で生きる彼らの関係性は、上下もしくは横の関係性の中で過ごしています。上下は先生、先輩、後輩との関係性であり、横の関係性は友人との関係性です。では、地域の中で彼らのどのような関係性を交わる人々と結ん

でいくのでしょうか。そこでは、「斜めの関係（親でも先生でもない大人とのつながり）」の中で、中学生はありのままの自分を承認される経験を積み重ねます。ある場所では「教わる側」、ある場所では「年下の面倒を見る側」、さらにある場所では「共に創っていく者」という多層的な経験をします。そのような経験は、彼らのアイデンティティを豊かにし、揺るぎな「私」という存在が育っていく機会です。

カオスの豊かさとは、用意されたルールから外れ、多様な他者との交わりの中で、衝突、共鳴、葛藤、重圧、解放、目覚めなどを獲得しながら、「自分は何者か?」を問い続けるプロセスそのものです。彼らは地域の中で、自らの時間をデザインし、多様な価値観の波を泳ぎきる力を手に入れます。その先にあるのは、既存の「部活動」という枠組みを超えた、一人ひとりが自分のペースで人生を謳歌する、自律した若者の姿です。

そのような姿を願いつつ、私たち青少年団体は、芯のあるしなやかさを持ち合わせ、彼らに伴走（共に歩む）する姿勢で活動を続けなければなりません。私たち自身も私たちは何者かを問い続けなければなりません。そして、お互いに問い続けることができる連帯を作っていくことで、部活動地域移行の移行先になるのではないのでしょうか。



私たちのねがい

私たちは、「体験の格差」や「青少年の居場所」、そして「部活動の地域展開」という大きな課題に向き合っています。

これまでの活動を青少年活動という枠組みだけで完結させるのではなく、社会のあり方そのものを問い直す本質的な論点が見えてきました。

私たちが青少年を見つめながら社会に対して抱く、切実な「ねがい」をここにまとめます。

1 「合理性」という物差しを、青少年の成長に当てはめないで

現代社会は「タイパ（タイムパフォーマンス）」や「コスパ」を重視する効率至上主義に覆われています。しかし、青少年活動の真価は、そうした「社会的合理性」の対極にあります。私たちのねがいは、子どもたちが誰かに評価されるためではなく、「面白いからやる」と心ゆくまで「遊びこむ」非合理的な時間を、社会が「無駄」として切り捨てないことです。効率や達成を求めがちな学校空間から、多様な価値観が交錯する地域「カオス」へと踏み出すことで、子どもたちは初めて「自分にとっての正解」を自ら模索し、不確実な社会を生き抜く柔軟性を手に入れるのです。

2 「居場所」という見えないインフラを、社会の責任で守って

居場所とは、空気のようなものです。心地よい時は意識されませんが、失われた途端に子どもたちは息苦しさに直面します。コロナ禍で家庭以外の青少年の居場所が奪われた結果、自尊感情の低下や深刻な「生きづらさ」が顕在化しました。私たちのねがいは、青少年の居場所を、蛇口をひねれば水が出る「インフラ」のような当たり前の存在にすることです。居場所の喪失は、単なる「寂しさ」の問題ではなく、将来的な社会的孤立や挑戦する心の喪失に直結します。社会全体でこの「見えないインフラ」を育む風土を築かなければなりません。

3 「一人でできる」の呪縛を解きましょう

私たちはこれまで、一人で何でもできることを「自立」と呼び、青少年にも自助努力を促してきました。しかし、私たちがたどり着いた結論は、「自立とは依存先（頼れる人や場所）を増やすことである」という視点です。私たちのねがいは、子どもたちが家族以外の多様な大人と出会い、困った時に「助けて」と言える受援力を育める社会になることです。依存先が多層的なセーフティネットとなって初めて、若者は勇気を出して一歩踏み出し、自らの人生の主権を確立することができます。

4 「Doing (何ができるか)」よりも「Being (そこにあること)」の肯定を

今の社会は、成果や能力といった「Doing」で人を評価しがちです。しかし、それが若者を追い詰め、成功のルールから外れることへの過度な恐怖を生んでいます。私たちのねがいは、「ただ、そこに存在し、息をしていること (Being)」そのものが肯定される社会です。評価の物差しを脇に置き、ありのままを承認される「斜めの関係」の中でこそ、揺るぎないアイデンティティは育まれます。大人世代こそが、自らも「こうありたい」と人生を謳歌するロールモデルとなり、共に歩む伴走者となってほしいと願います。

青少年活動は、社会から切り離された「非日常の体験」を提供する場ではなく、社会の一部であり、社会のあり方そのものを問い直す最前線です。

今、私たちの社会は合理性を過剰に追求するあまり、

青少年が「ただ、そこに存在すること」そのものの価値を軽んじてはいないでしょうか。

大人が無意識に放つ「お前は どうしたいんだ」という問いが、

本人の主体性を引き出すどころか、時には彼らを追い詰める鋭利な刃となっている現実、

私たちはもっと自覚するべきです。

青少年を「育てる対象」と見る大人の側の無意識の前提を、

私たち自身が見つめ直さなければなりません。

彼らに正解を教える「教育者」ではなく、共に悩み、共に笑い、

共に社会を変えていく「伴走者」としての姿勢で存在し続けたいと考えます。

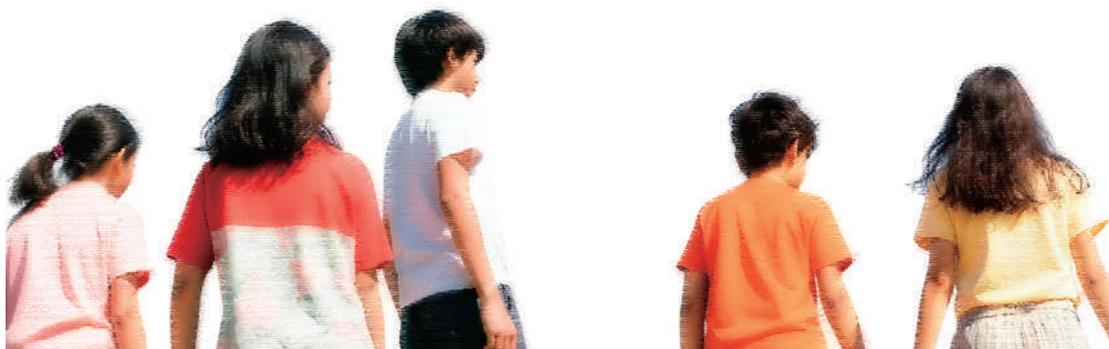
私たちの歩みは、今回の調査研究で終わるものではありません。

これからも多様な団体のハブとなる専門家集団として、

「社会がどうあるべきか」を現場から問い直し、

すべての青少年が自らの人生の主権を確立できる社会を目指して、発信し続けていきます。

兵庫県青少年団体連絡協議会 調査研究委員会



ひょうご青少年憲章

いま、私たちは暮らしや社会のあり方が大きく移り変わる転換の時代にあります、
先の阪神・淡路大震災は、人と社会に何が必要なのかを改めて教えてくれました。

私たちは、これまでの自分の生き方を省みて人間生活の基本に立ち返り、
自らを尊ぶと同時に、家庭や地域や国、
そしてかけがえのない地球に生きる人間として、ひょうごの明日を担う青少年とともに、
自信と夢と勇気をもって21世紀を築いていくことを誓い、この憲章を定めます。

- 1 自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう
- 2 ふれあいを深め、正義感を持ち、社会を担う一人として生きていこう
- 3 人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう
- 4 多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていこう
- 5 自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう
- 6 先人に学び、明日に夢をえがき、勇気をもって未来を拓いていこう

「ひょうご青少年憲章」の考え方

自尊・自律

自分を大切にし、自らを律し、
行いに責任をもって生きていこう

自ら考え、自ら判断し、自らを律していく自律性は、
人間の本質に属します。

そこで人は、おのの自らを尊重し自信と誇りをも
つとともに、権利や自由だけではなく、それらと
不可分に結ぶ義務や責任も果たしていくことが欠か
せません。

協力・公正

ふれあいを深め、正義感を持ち、
社会を担う一人として生きていこう

人間は社会的な存在であり、人々の協力・協働に
よって暮らしを営んでいます。

人と人とのふれあいを深め、社会の基本的なルー
ルを守り、社会の構成員としての役割を担っていく
ことが望まれます。

思いやり

人の痛みや喜びを
感じあえる心をもって生きていこう

人間関係には、利害にもとづく合理的な関係と、そ
れを越えた心のかよあいがあり、温かい人間関
係を生み出すのは後者です。

そこで、人間的なぬくもりのある社会関係が形成さ
れていくには、どうしても共感や思いやり、あるい
は友愛の心が育まれていくのでなければなりません。
そうでなければ、人間関係は合理性のみを追
求するものとなり、人間的なぬくもりは消えていくこ
とになるでしょう。

寛容・共生

多様な人々の存在を受け入れ、
ともに支えあって
生きていこう

社会は、自分と異なる立場にあたり、様々な価
値観をもった人々で成り立っています。

社会の急速な変化のなかで、価値観やライフス
タイルの多様化が進み、人・モノ・情報などの地球
規模での交流も加速しています。

このような状況のなかで、調和ある共生社会を構
築するためには、人々が互いの違いを認めあい、
尊重しあうことが不可欠です。

畏敬

自然を愛し、生命を尊び、
みえない世界にも
襟を正して生きていこう

古来、私たちの先祖は、美しくも厳しい自然を畏敬
の念をもって見つめ、その営みに自らの生活をあわ
せながらひたむきに生きてきました。しかし急速な
科学技術の発達や経済の発展の中で人知と人力に
対する過信が生じ、自分と自分を取り巻く世界に対
する敬虔さといったものが失われ、人・社会・自
然の調和は崩れてきました。

私たちは、今一度、人間生活の基本にかえり、自
分たちの暮らしや生き方を見直していくことが大切
でしょう。

創造

先人に学び、明日に夢をえがき、
勇気をもって未来を拓いていこう

理想や夢を抱き、その実現に向けて努力することは、
人間だけに備った特性であり、人や社会のありよ
うを決定する基礎となります。21世紀がどのような
社会となるか、また、各自の生き方がどのようなも
のになるかは、私たち一人ひとりが何を理想とし、
どう行動していくにかかっています。

私たち大人が、“こころの豊かさ”を大切にしながら、
自信と誇りをもって生活していくとき、子どもたちも
温かい思いやりの心や明日をたくましく切り拓く力を
身につけて、勇気をもって希望に満ちた未来へ大
きく羽ばたいていけるようになることでしょう。

兵庫県青少年団体連絡協議会

兵庫県青少年団体連絡協議会 2025年度 加盟団体 24団体 (順不同)

一般社団法人 兵庫県子ども会連合会	兵庫県商工会青年部連合会
日本ボーイスカウト兵庫連盟	公益財団法人 神戸 YMCA
一般社団法人 ガールスカウト兵庫県連盟	公益財団法人 神戸 YWCA
一般財団法人OAA(野外活動協会)	兵庫県青年洋上大学同窓会
兵庫県BBS連盟	一般財団法人 兵庫県少林寺拳法連盟
兵庫県ユースホステル協会	兵庫県緑の少年団連盟
一般社団法人神戸青年会議所	兵庫県モラロジー青少年団体連絡協議会
公益社団法人日本青年会議所近畿地区 兵庫ブロック協議会	兵庫県世界青年友の会
兵庫県スポーツ少年団	一般社団法人 神戸国際支縁機構
兵庫県青年国際交流機構 (IYEO)	NPO法人生涯学習サポート兵庫
一般社団法人 いえしま自然体験協会	NPO法人 ブレーンヒューマニティー
認定NPO法人 兵庫子ども支援団体	認定NPO法人 まなびと

兵庫県青少年団体連絡協議会 調査研究委員会

委員長	山崎 清治 (生涯学習サポート兵庫 理事長)
委員	小寺 隆志 (神戸YMCA ウェルネス事業統括)
委員	松本 学 (ブレーンヒューマニティー 代表理事)
委員	中山 迅一 (まなびと 理事長)
編集委員	高田 愛 (生涯学習サポート兵庫 事務局長)
編集委員	沼田 香織 (生涯学習サポート兵庫)
編集委員	瀧川 桃香
編集委員	岡本 恭子

兵庫県青少年団体連絡協議会 事務局

〒653-0036 神戸市長田区腕塚町 5-3-1 アスタくにつか 1 番館南棟 3 階

(公財) 兵庫県青少年本部 活動支援部内

TEL : 078-891-7410 FAX : 078-891-7418

<https://seidanren.net/>

